

「男、突っ走る！」

第19回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

門野賢哉 (17)	中岡	高階	志田	山辺	田崎	濱口	木内	木内	木内
	壮吾	康行	悠喜	一磨	良樹	寧々	健次郎	真保	雅也
	(17)	(17)	(17)	(17)	(17)	(17)	(13)	(44)	(17)
元中央高校生徒	中央高校2年2組生徒	中央高校2年2組生徒	中央高校2年2組生徒	中央高校2年2組生徒	中央高校2年2組生徒	中央高校2年2組生徒	雅也の弟	雅也の母	中央高校2年2組生徒

1 市民病院・全景（夜）

2 同・廊下

真保と健次郎が深刻そうに待っている。

健次郎「ねえ、お兄ちゃん死んじゃうの？」

真保「そんなわけないでしょ」

健次郎「だって、あんなに痛がってたじゃん」

真保「腹痛だけで死ぬなんて、考えられない」

健次郎「分かんないじゃん、検査の結果見て

みないと。じゃあ母さんは、お兄ちゃんの

病気が何か分かるのか？」

真保「随分強く反抗するようになったね、あ

んたも」

と、ドアが開き、ストレッチャーに運

ばれた雅也と、付き添いの医師が出て

くる。

真保「先生……」

医師「今、血液検査の結果が出ました。ご本

人にも聞いていただければと思うので、こ

ちらで」

と、案内をする。

3 同・外来室

ストレッチャーからベッドに自力で移動する雅也——側に真保、健次郎、医師。

医師「血液検査の結果、この数値的に雅也さんは、白血球が激しく減少しています」

真保「白血球の減少？」

雅也「先生、僕死ぬんですか？」

医師「（笑って）白血球が減少しただけそんな大事にはなりませんよ。（と真保に）白血球には体内の老廃物を出す働きがあります。ですが雅也さんは白血球が減っていますので、体内に老廃物が溜まってしまっていたんです。下腹部の痛みは、おそらく尿や便が思うように体内に排出されず腸内で溜まってしまったことが原因でしょ」

真保「そうですか……」

雅也「確かに……ただの便秘かなと思ってま

した」

医師「まあ、しばらく便が出ないと感じたら便秘と思うのは当然でしょうね」

真保「それで、どうすれば？」

医師「お薬出しておきます。ご飯を食べて、しっかり休んで、不規則な生活はしないようにすれば、白血球もちゃんと働いてくれますから」

雅也「……」

真保「この子、つい先日胃腸風邪になって学校を休んでたんです。そのことは、何か関係があるんでしょうか？」

医師「胃腸風邪ですか……ウイルスが体内に残っていたのかもしれないですね。まあ、検査の結果的には、他に異常がないので、もうお帰りいただいて結構ですよ」

雅也「入院しなくても良いんですか？」

医師「ええ。お薬飲んで、しっかり休めば大丈夫ですから。（と真保に）では」

と、一礼して去っていく。

4 木内家・玄関（朝方）

真保と健次郎に付き添われて、雅也が  
帰宅する。

真保「大丈夫？」

雅也「うん」

真保「さつき下剤入れてもらったから、何か  
効果あると良いけど」

健次郎「今日、学校休もうかな」

雅也「何言ってるんだ。お前は行きなさい。」

兄ちゃんも、昼から行くから」

真保「あんた、そんな体で学校行くの？」

雅也「だってマラソン大会の練習があるんだ  
もん。休んだら、本番の次の日から補習で  
走らなきゃいけないんだよ。本番で全力出  
したいのに、その後も走るなんて嫌だもん」

真保「大丈夫なの……？」

雅也「無理しない程度に走るから大丈夫。ど  
うせいつもの周回遅れだろうし」

真保「まあ、無理だけはしないでね」

雅也「うん。（と下腹部に痛みを感じ）あ：

…ヤバい…：痛い…：これ、出る」

と、慌ててトイレに向かって走って行く。

5 中央高校・全景（朝）

6 同・2年2組教室

一磨、良樹、康行が話している。

良樹「今日もマラソン大会の練習かあ」

一磨「今週末で終わるんだから、辛抱辛抱」

良樹「そうだけどさあ…：」

康行「（辺りを見回して）そういえば、まだ木内来てないね」

一磨「あれ、確かに。珍しいよね、いつもなら来てるはずなのに」

良樹「何かあったのかな？」

一磨「さあ」

7 木内家・居間

真保が携帯電話で話している。

真保「（携帯電話に） そうなの。まあ、大事には至らなかつたから良かったんだけどさ。昨日の深夜にいきなり。もうびっくりしちゃったわよ。いつも元気な雅が、いきなりあんなことになっちゃうんだもん……そりゃ救急車呼ぶしかないでしょ。その場になかつたら分からないと思うけど、冷や汗かいて意識が朦朧としてたんだから。え、原因？ 白血球が減少してたんだって。何でってこつちが知りたいわよ。でも外来の診察と治療ですぐ帰ってこれたから良かったんだけどね。雅？ 今眠ってる。でも昼から学校に行くんだって。うん、それぐらい元気だから」

と、雅也が入ってくる。

真保「（携帯電話に） 全然元気そうよ。うん、はいはい、雅にはそう伝えとく。じゃあ」

と、電話を切る。

雅也「父さんに話したの？」



真保「そりや伝えとかないと」

雅也「別に大したことはないのに」

真保「深夜に救急車に運ばれたことの、何が

大したことないのよ」

雅也「そりやあの時は大事になったけど、結

果的には腸にいろんなものが溜まってたっ

てオチじゃん」

真保「そりやそうだけど」

雅也「じゃあ、着替えたら学校行くわ」

真保「え、ご飯は？」

雅也「今は良い。お腹痛くなると嫌だし」

真保「そんなことで痛くならないでしょ」

雅也「マラソン大会の練習中に、何かあると

怖いから。軽く歩くぐらいだし、今から行

っても五時間目と六時間目だけだもん、ち

よつとぐらい食べなくたって」

真保「まあ、そこまで言うなら別に良いけど」

雅也「じゃあ、無理しない程度に行ってきま

す」

と、出ていく。

一磨、良樹、康行、その他生徒たちが  
昼食を食べている——雅也が登校して  
くる。

雅也「おそようございます」

一磨「木内！ どうしたの遅刻なんて」

康行「何かあったの？」

雅也「昨日の深夜、救急車で運ばれちゃって  
さ」

良樹「え？」

一磨「何があったの？」

雅也「大したことじゃないんだよ。いきなり  
腹痛に襲われてさ、何があったのかなあと  
思っただけで血液検査するでしょ。そしたら先生  
から『白血球が減少してます』って言われ  
て」

康行「白血球？」

雅也「俺死ぬのかな……って思っちゃった」

一磨「白血球が減ってるのが、腹痛とどう

いう関係があるの」

雅也「お昼のご飯中に話す内容じゃないかも  
しれないんだけど、白血球って老廃物を外  
に出す働きがあるんだって。けどそれが減  
ってるってことは、本来外に出すべき便や  
尿が溜まっちゃうんだって」

良樹「要するに便秘だったってわけだ」

雅也「簡単に言うतそういうことだな」

一磨「けど、大事に至らずに良かったね」

雅也「そうなんだよ。入院する必要もないつ  
て言われたし、マラソン大会の練習も参加  
したかったから、無理やり来ちゃった」

康行「え、今日のマラソン大会の練習やる

の？」

一磨「大丈夫なの？」

雅也「だって補習で走るの嫌だもん。こうい  
うことは、少しでも早く終わらせたいの」

良樹「まあ、その気持ちは分かるよ」

雅也「今日は無理しない程度にして、たまに  
歩いたり、上手いことやるから」

9 学校周辺の道

生徒たちが走っている——その中で、ランニング程度に歩いている雅也。

N 「マラソン大会の補修を受けるのが嫌だ、その一心で、僕はちよつと無理をしてもマラソン大会の練習をやったのでした。学校という環境にいと、昨日の深夜から今朝にかけて起きた出来事が、まるで何事もなかったかのような錯覚を起こしていました。結局その後も、特に体調に異常もなく、週末にはマラソン大会の本番を迎えました」

10 中央高校・グラウンド

女子生徒たちがコートに並んでいる——近くまで見に来る男子生徒たち。スタートーピストルが発砲され、女子生徒たちが走り出していく。

先頭の何人かに混ざっている寧々。

N 「前半に女子の部が始まりました。濱口は

昨年同様、全校生徒のベスト十に入る記録を達成したのでした」

11 学校周辺の道

雅也、康行、一磨、良樹が走っている。  
N「後半は男子の部が行われました。案の定、僕もかっちゃんも良樹も康行も、後ろから数えて何番目というぐらいの位置でした。やっぱり運動が苦手な人は、顕著に結果として反映されるものだ」と

12 木内家・雅也の部屋（夜）

雅也がパソコンでブログを書いている  
——と、携帯電話に着信が鳴る。賢哉からである。

雅也「もしもし？」

賢哉の声「おお、お前大丈夫か？」

雅也「何が？」

賢哉の声「何がじゃねえよ。ブログ見たぞ。

救急車で運ばれたんだって？」

雅也「ああ、そのこと。簡単に言うと、便秘

なの」

賢哉の声「何だ、それ」

雅也「だから言ったでしょ。大したことない  
って」

13 門野家・賢哉の部屋

賢哉「まあ、元気そうなら良いけどさ」

雅也の声「ご心配おかけしました」

賢哉「あ、そうだ。お前に伝えたいことがあ  
って電話したんだ」

雅也の声「何？」

賢哉「俺、四月から通信制高校に通うことに  
なったよ」

14 木内家・雅也の部屋

雅也「（微笑んで）そう。それは良かった」

賢哉の声「やっぱり、高卒の資格は持つとか  
ないと、何かと不便だって気づいてさ」

雅也「ようやくやくまともになってくれたんだ」

賢哉の声「競艇は変わらず行ってるけどな」

雅也「何だッ。まあ、しょうがないよね、か  
どけんにとって競艇場は庭みたいな場所だ  
もんね」

15 門野家・賢哉の部屋

賢哉「いや、第二の家だよ」

雅也の声「庭から進化してるじゃん」

賢哉「きのしゅんも、同じところに通うこと  
になった。二年生の途中で俺たち辞めたか  
ら、四月からは通信制二年から始めること  
になる」

雅也の声「通信って四年制だっけ？」

賢哉「ああ。だから、みんなが卒業して一年  
経ったら、俺も無事に高校卒業だ」

雅也の声「一年多めにやらなきゃいけないと、  
大変だね」

賢哉「まあ、しょうがねえよ。今になって思  
うよ、みんなと卒業したかったって」

16 木内家・雅也の部屋

雅也「かどけん……それは、かどけんだけじゃない。俺も、志田もそーぴも、かどけんの周りにいた人たちはみんな思ってることだよ」

賢哉の声「そうか……」

雅也「でも良かった。辞めてからどうするつもりなのか心配してたの。けど、余計な世話を焼くのもどうかと思って何も言わなかったの」

賢哉の声「だからこうして報告したんじゃないか。お前には散々迷惑かけたんだから」

雅也「あ、一応迷惑をかけてた自覚はあるんだ」

賢哉の声「まあな」

雅也「（笑って）頑張ってるね、応援してるから。また高校辞めたなんて報告聞きたくないからね」

賢哉の声「分かってるよ」

雅也「相談だったらいつでも乗るから」



賢哉の声「ああ、ありがとう」

雅也「じゃあね」

賢哉の声「じゃあな」

と、電話が切れる——安堵の笑みを浮かべる雅也。

N「久方ぶりの、かどけんからの電話でした。通信制高校に通い、新たな生活を始めようとする報告は、僕にとっては何よりも嬉しい出来事でした。一緒に卒業したかったという気持ちは、今でも思っていることではありますが、通信制高校に通い始めるかどけんのことを応援してあげようと思ったのです」

17 中央高校・全景（朝）

18 同・2年2組教室

雅也、悠喜、壮吾が話している。

悠喜「へえ、おっちゃんが通信制高校ねえ」

雅也「そうなの。ようやく落ち着いてくれた

みたいで、俺も安心した」

壮吾「やっぱり高卒までないと、今時厳しいのかもしれないね」

雅也「それに気づいてくれただけ良かったよ。中卒で採用してくれるところなんて、今時そうそうないだろうしね。まあ、これからかどけんがどんな道に進むかは分からないけど」

悠喜「なあ、今度みんなで飯でも行かねえか」  
雅也「え？」

悠喜「おっちゃんも呼んで、みんなで集まったらどうかと思って」

壮吾「それ良いね。そういう機会作らないって、みんなでかどけんには会えないし」

雅也「言われてみれば俺たち学校以外で集まったことなかったよね。たまにはそういう時間も良いかもしれないね」

悠喜「よし、決定。おっちゃんには、俺から連絡しとく」

雅也「よろしく」

と、一磨が雅也に手招きして、

一磨「木内、ちよつと良い？」

雅也「うん。（と悠喜たちに）ちよつとごめんね」

と、一磨、良樹、康行のもとへやってくる。

雅也「どうしたの？」

一磨「木内、来年の進路どうする？」

雅也「進路？ 俺は脚本家だけど」

一磨「それって、就職になるの？」

雅也「多分、就職。まあ、学校に来る求人とかじゃなくて、自分で見つける自己就職ってことになるんじゃないかな」

一磨「そっか」

雅也「三人は、これからどうするの？」

康行「俺は就職」

良樹「俺は大学かな。特にここっていうのは決めてないけど」

一磨「俺はとりあえず就職にしとく。もし決まらなかつたら、進学も考えてる」

雅也「もうそんなこと考えなくちゃいけない時期になったんだね……まあ、それもそうか。あと一ヶ月半もすれば、二年も終わっちゃうわけだし」

康行「俺たちは、学校に来る求人に応募すれば良いけど、木内の場合、そんな簡単に見つかるのかな」

一磨「もし見つからなかったら、就職浪人になっちゃうってことだよな」

雅也「そうならないために、今だって脚本書いてるし、脚本家を募集してる事務所に売り込みもしてるよ。まあ、あまり良い結果はもらえてないけど」

良樹「やっぱり、狭き門なんだ」

雅也「まあね。それに、一つの仕事が仮に決まったとして、その後も仕事が来るっていう保証もないからね」

康行「そっか。その仕事が決まっても、それきりになる可能性があるってことか」

雅也「うん。だから、作家さんって普段どう

やって生活してるんだらうって考えちゃう  
んだよね」

康行「バイトとか、やっぱり生活していくた  
めにやってるのかな」

雅也「売れない脚本家とかは、兼業作家って  
いう形で他に仕事持つてる人もいるのかな。  
そういう業界のこと、もっと調べないとい  
けないな。まだ俺も全然業界のこと知って  
るわけじゃないしね……」

良樹「俺も、今の自分のレベルで行けそうな  
大学が県内にあるのか調べとこ」

雅也「そろそろ真剣に、進路考えなきゃいけ  
ないね」

康行「そんなこと考えていくうちに、あつと  
いう間に三年生も終わるんだらうね」

一磨「今年の一年も早く感じたし。あと数ヶ  
月で三年生かよ、俺たち」

雅也「確かに。時の流れの速さにゾツとする  
わ」

良樹「なあ、図書室行くか？」

雅也「そうだね。何か参考資料あるかもしれない」

「ないもんね」

一磨「よし、行こう」

康行「オッケー」

と、出ていく雅也たち。

19 同・廊下

雅也、良樹、一磨、康行が歩いている。

N 「気が付けば、高校生活の三分の二が終わろうとしていました。進学や就職と、それぞれが真剣に高校卒業後の進路を考える時期になっていたのです。その中で、僕は脚本家として就職ができるのかと、内心不安になっていたのです」

つづく